



TITLE:

<基調講演>子どもたちと森で学んだこと

AUTHOR(S):

久山, 慶子

CITATION:

久山, 慶子. <基調講演>子どもたちと森で学んだこと. 時計台対話集会
2011, 7: 29-42

ISSUE DATE:

2011-02-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/176978>

RIGHT:

子どもたちと 森で学んだこと



久山 慶子

フィールドソサイエティー事務局長

ひさやまけいこ

1958年兵庫県生まれ。1985年より「法然院森の教室」世話人、1989年より「森の子クラブ」リーダーとして環境学習活動を始める。1993年「法然院森のセンター」が開設され、活動の継続発展のため同時に創設されたフィールドソサイエティーの事務局長として、自然に関する展示や図書を備えた同センターの運営、子どもたちの野外体験、お寺の森での「観察の森づくり」など、様々な活動に携わる。京都府緑の公共事業政策検討委員、京都モデルフォレスト協会森林づくり基金運営委員、京都市私立幼稚園連盟研修会講師、「天王山森の学校」講師なども務める。主な著書は『身近なときめき自然散歩』（共著、淡交社）、『大文字山を歩こう』（共著、ナカニシヤ出版）など。

子どもたちと 森で学んだこと

私たちの活動は、一九八五年に自然をテーマにいろいろなことを学んでいこうと開始された「法然院森の教室」を母体としています。お寺と市民が協力し、広く市民を対象とした講演会や観察会などを開催してきました。今日は、特に子どもたちとの活動である「森の子クラブ」での子どもたちの様子を中心にお話させていただきます。

「森の子クラブ」は、一九八九年に、「法然院森の教室」の自然観察活動の中から生まれました。その年の七月の会誌に、このような文章が掲載されています。「今、何が子どもたちに必要なのか。実践の中から理解していきたい」。

本当に、手探りの出発だったと思います。テーマごとに募集をかけた二年間を経て、一九九二年からは、年間でメンバーを固定し、月例会として開催する今の形に定着しました。対象は

小学校三年生から中学生まで、主なフィールドは大文字山から法然院の森です。そこでの野外体験活動を基本にしながら、法然院に宿泊するプログラムや、稲刈り体験、夏合宿なども行っています。

「森の子クラブ」の開始によって、森に学ぶことの意義がより確かなものになり、「法然院森のセンター」の開館も実現しました。それを機に、市民側は「フィールドソサイエティー」と名乗るようになりました。

早いもので、「森の教室」の開始からは二十五年、「森の子クラブ」で子どもたちと森に出かけるようになって二十一年、「森のセンター」ができてからも一七年という時間が経っています。あらためて感じるのは、お寺の森をフィールドにしてきたことの意義です。今でも「寺子屋」という言葉が生きているように、

お寺は、人々が集い交わりながら学んできた場所であり、地域の要としての拠点の役割も持つ場所です。そのことが、子どもたちが安心してこの活動に参加できることにつながってきたのではないかと思います。

**子どもたちが、生き物たちのつながりに気づく。
そんな体験を持つことが、最初の一步。**

さて、本日のパンフレットには、こんな文章が載っています。「森里海連環学の理念を持つて実践する次世代を育む教育、人づくりが、日本の豊かな生態系や持続可能な自然の利用を実践する上で不可欠」。

これは、理科教育や公害教育の要素が強かった以前の「環境教育」の概念には収まりきらない課題だと感じます。「持続可能な自然の利用」を実現しようとする、社会の仕組みの変革にまで及ぶので、「環境教育」は、「持続可能な社会のための教育」と表現されることも多くなりました。このような社会的な課題も含まれるテーマに向けて、私たちの「森の子ク

ラブ」のお話から何かしらのヒントを受け取っていただくために、次のような提案をしたいと思います。

まず、「森里海連環学の理念」の言葉を「森里海の深いつながりを感じる」と置き換え、そして、「持続可能な自然の利用を実践する」というところを「その地域ならではの自然の恵みを理解して享受する」と置き換えてみる。その上で、それぞれの事柄に向けて、今育ちゆく子どもたちにとっての「初めの一步」とは何であるか、ということを考えたいというものです。

「森里海のつながりを感じる」ための「初めの一步」、それは、極めて具体的に生き物たちのつながりに子どもたち自身が気づくということではないかと思います。実物を目の当たりにして、生き物同士の関係性、つながりを実感する。そんな体験を持つことが、出発点です。単独で生きているものは「つもない」という発見と確信が、「森里海連環学の理念」への理解を支える土台になると考えます。

そして、「その地域の自然の恵みを理解して享受する」ための「初めの一步」とは、自分の住んでいるところや暮らし方に愛着を抱くことができるということだと思います。子どもにとつて、

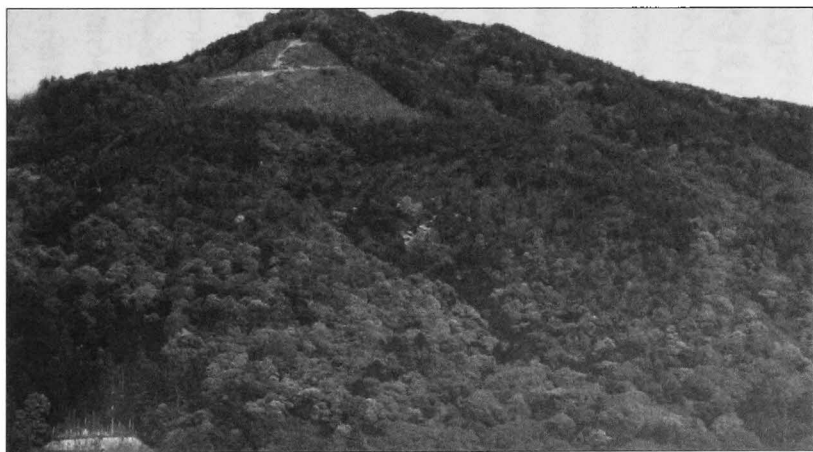
自分が育つ地域とは「世界」そのものであり、自己の形成を果たしていく空間です。ふるさとと思える自然環境があること、原風景を持つこと、このことが、人として生きてゆく基盤となることは間違いないと思います。子ども時代には無意識かもしれませんが、好きだと思える環境に囲まれていることが本当に大切です。それはまた、大人になつて、多様な価値観、多様な地域性を前に、「持続可能な自然の利用」のための判断をしなければならなくなつたときの、判断基準になるのではないかと思います。

人にとって森がどんな存在であつたか。

“学ぶ場としての森の価値”を再認識する。

では、ここからスライドをご覧くださいながら、フィールドの紹介を含めて具体的なお話をしていきたいと思います。

フィールドにしている大文字山と法然院の森です(写真①)。京都大学から本当に近いところです。法然院は、東山第十一峰如意ヶ岳・大文字山に連なる第十四峰善気山に、約十二ヘクタールの敷地を持っています。街中からすぐのところにお寺の森



写真① 如意ヶ岳(大文字山)の真下に広がる法然院の森(善気山)

が広がっていることがお分かりいただけると思います。

比叡山と大文字山の間の低くなった地形が物語っているように(写真②)、大文字山の北側は風化しやすい花崗岩地帯で



写真②

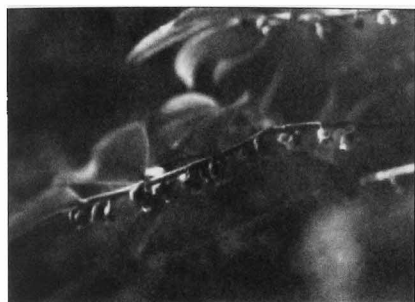
す。頂上辺りはホルンフェルスの固い地盤、南側はそこからずっと連なる丹波層群と、大文字山は、地質の違いによる多彩な自然環境が見られるユニークな山です。さらに、「送り火」の伝統行事によつて、火床周辺はいつも刈り込まれ、明るい森が維持されています。一方、麓には八神社、銀閣寺、法然院、安楽寺、霊鑑寺、そして大豊神社と社寺が続き、いわゆる鎮守の森やお寺の森が残されています。文化的につくり出された植生も豊かなところです。

法然院の森の様子です。参道とその周囲にはムクノキなどの落葉樹の大きな木が見られます。建物のすぐ裏手にはシイ林が広がっています。花が咲く季節には、樹冠がモコモコと見えます。アラカシ、ヤブツバキなどの照葉樹やヒノキも多い、お寺の森らしい常緑樹林です。

子どもたちと森で活動する上でも、人にとつて森がどんな存在であったのかを知ることが、基本となります。大昔は、森が山だけでなく平野部にも広がっていたことを想像してみなければなりません。日本列島では、人は千年万年の単位で、森に抱かれるように暮らしていました。考古学の絵本には、そんな縄文時



写真③



写真④



写真⑤

代のイラストも載っています。そして、稲作文化とともに里山環境が定着してきて二千年余り。京都は、平安京の時代から、三山の森の恵みによつて、人の暮らしが発展してきたところです。残されている絵図などからはその歴史を読み取ることができます。すし、現在の風景からもその名残を感じることができます。

身近な森は、長い間、人にとつて「暮らしの資源」そのものでした。やがて、近代化とともに、身近な森の役割は「風景」や「環境」における森林機能へと変化します。暮らしと森が切り離さ

れた時代のなか、人が生きるために培ってきたさまざまな知恵を再認識する必要性が、今、ふたたび叫ばれるようになってきました。あらためて、学ぶ場としての森の価値を感じます。

生き物にとつて食糧である森の実りは、植物が動物を利用した種子散布でもある。

ここからは、身近な森の魅力も含めて、生き物たちの様子と、子どもたちとのようにその観察を楽しむせてもらっているかをお話しいたします。

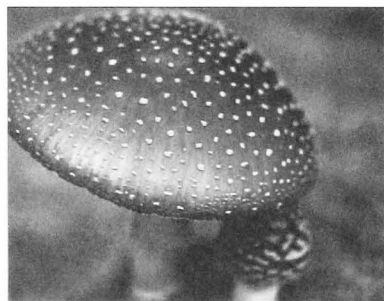
まず、森に咲く花です。お寺の森のヤブツバキでは(写真③)、花びらの赤い色に誘われてメジロやヒヨドリが吸蜜にくる様子が観察できます。ヒサカ



写真⑥



写真⑦



写真⑧



写真⑨

キ(写真④)は強いにおいを漂わせて早春の昆虫を誘っています。中腹に見られるクロバイ、ガマズミ、ウワミズザクラ(写真⑤)などは、どれも葉っぱを押しつけるように先端に花を咲かせて、虫を呼ばうとしています。尾根に多いモチツツジでは、春に花を観察したその冬に子どもたちとタネを調べたこともありました。

森の実ります。実はタネであると同時に、多くの生き物にとつての食糧です。植物が鳥や哺乳動物を種子散布に利用している様子には、本当によくできた相互関係を感じることができまます。タマミズキ、カナメモチ(写真⑥)、フユイチゴなど、森に赤い実が多い理由を考えてみたり、ムクノキ(写真⑦)やシャシ

ヤンボなど、黒紫色で人の目には地味に見えるものも、鳥には“おいしい色”と映っていることに驚かされたり。

子どもたちといろいろな木の実を拾い集めて、分解して、おいを確かめながら、中に入っているタネを取り出したこともあります。そんな作業をすると、巧妙な形の知恵にも気づかされます。実が野鳥に食べられて、消化されないタネだけがフンとともに種まきをされ、そこから新しい森の赤ちゃん、芽が出るといふ物語が、子どもたちにとっても好きです。

陸上の生態系を支えている菌類たちです。ヒビワレシロハツ、テングタケ(写真⑧)など、樹木と栄養のやりとりをしている共生

菌と、ムラサキシメジ(写真⑨)、カンゾウタケなど、植物遺体を分解して土に戻してくれている腐生菌、この共生菌と腐生菌それぞれの役割が、樹木の生活の鍵を握り、森の元気を保っています。

また、未だ謎に包まれている「冬虫夏草」、虫などを殺して子実体を伸ばすという殺生菌の存在からも、生き物の世界は人智では計り知れない不思議がいっぱいということを、実感させられます。

きのこの存在に森の循環を感じるためには、目に見える子実体だけでなく、菌糸の様子などをじっくりと観察することが大切です。生き物がうようよしている様子などを見かけることが日常的にとっても少なくなりましたので、落ち葉の下をめくってみることもなごぜひ楽しんでほしい、また、きのこ観察をきっかけに、地面の下、土の中にも想像を働かせて、菌類だけでなく、目に見えない生物がたくさんいることも感じ取ってほしいと思います。

菌類、微生物などに支えられて、多様な森の植生が成立し、その植生によって、ようやく動物たちの生息が可能になります。昆虫、両生類、爬虫類などを見つけると、手に乗せたり、し

ばらく拡大鏡のついた

ケースに入れて観察したりすることもあります。

森にすむカエルのもリアオガエルやタゴガエル(写真⑩)などにもよく出会えます。そんな

小さな生き物たちは、

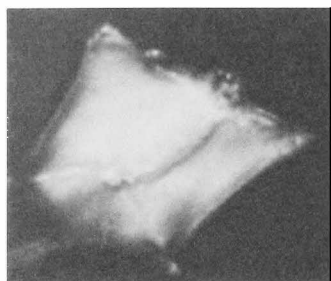
子どもたちにとって隣人そのもののようです。

野鳥も、今、何をしているところだろうという気持ちで見ると、そのしぐさの意味まで知りたくなるものです。何という名前の鳥がいたというのでおしまいにせず、少し時間をかけて見ること、おもしろさが変わってきます。

ただ、虫でも鳥でも、一つの生き物に出会えて、何を食べてどうやって暮らしているのか、知りたくなって調べてみても、なかなか分からないことばかりです。観察し続けたり本を探したりすることによって、合点した、納得したと思えることもあるのですが、とにかく生き物というものは謎に溢れていて、身近



写真⑩



写真⑪



写真⑫

な自然も未知なことばかり、分からないことばかりだという実感を受け取る方が、はるかに多いものです。その複雑さ、分からなさを感じることが、大切なのかもしれません。

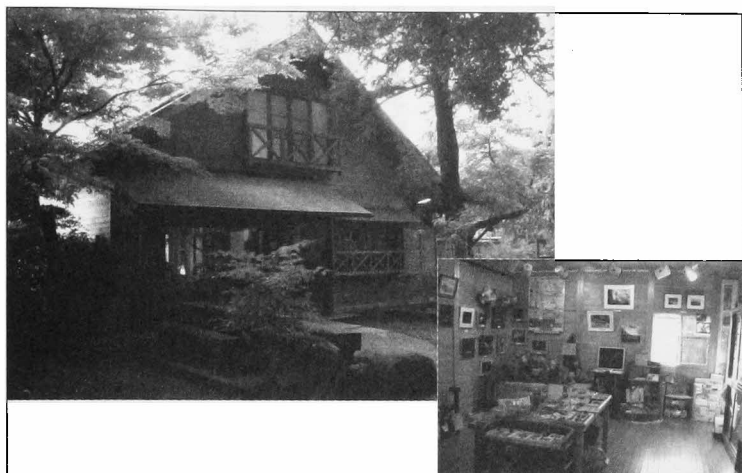
そして、哺乳動物たち。大木のあるお寺の森では、ムササビが暮らし続けています(写真⑪)。樹上生活者でもあり、観察しやすいので、夜の観察を楽しんでいます。以前、お寺の森のけものみちに赤外線カメラを仕掛けてみたところ、キツネ、イノシシ、テンなどが写りました。ムササビが地上を走る珍しい姿が捉えられたことも(写真⑫)、嬉しいおまけでした。近年、この森でもシカが増えてきているため、今仕掛ければ、シカも写るかもしれません。各地で深刻化している食害も起きており、後ほど述べ

る森づくりでも、できるだけよい方法で手入れを行っていくかなければと考えているところです。

初めて森を体験した子どもたちの感想を聞いてあらためて子どもたちの日常を考える。

生き物たちの紹介はこの辺りにして、次は、活動についてお話いたします。活動の拠点である「法然院森のセンター」です(写真⑬)。お寺のお堂としての名前は「共生き堂」です。ギャラリー展示の部屋と、文庫を兼ねたワークルームを備えています。今も市民に親しまれている身近な里山、京都ならではの杜寺院、そこに拠点となるセンターがあるというこの場を、もともと実際の問題に活かさなければと思うことが、多くなりました。具体的に学んで、具体的に活動していきたいと願っています。

ギャラリー展示を紹介します。ムササビの食痕が残る葉っぱ、去年の台風で倒れた木に空いていたムササビの巣穴、そして、その中に敷き詰められていた巣材のスギの皮です(写真⑭)。見つけたテンのフンを水洗いしてみたら、タネが入っていました。



写真⑬ 「法然院森のセンター」外観とギャラリー

拾えた野鳥の巣や羽も並べています。子どもたちが分解したヒヨドリの巣も展示しています。子どもたちは、小さなかけらも見逃しません。フクロウのペリットを、臭さも楽しみながら分解してみたときには、ネズミの骨が本当に細かいところまで吐き出されていて、驚きでした。

これぞという発見をしたときには、子どもたちも「森のセンターに展示しよう」と言ってくれますので、そういったものも並べて、手作り感覚で作ってきたギャラリー展示です。

二〇〇三年より、お寺の森で森の手入れを開始しました。「観察の森づくり」という名称をつけています。間伐をしたり、観察路をつくったり、樹木名札を設置したり、さまざまな取り組みを行ってきました。専門家のアドバイスを受けて、麓の森から尾根の森まで、植生によって区分を設けてそれぞれの管理



写真⑭

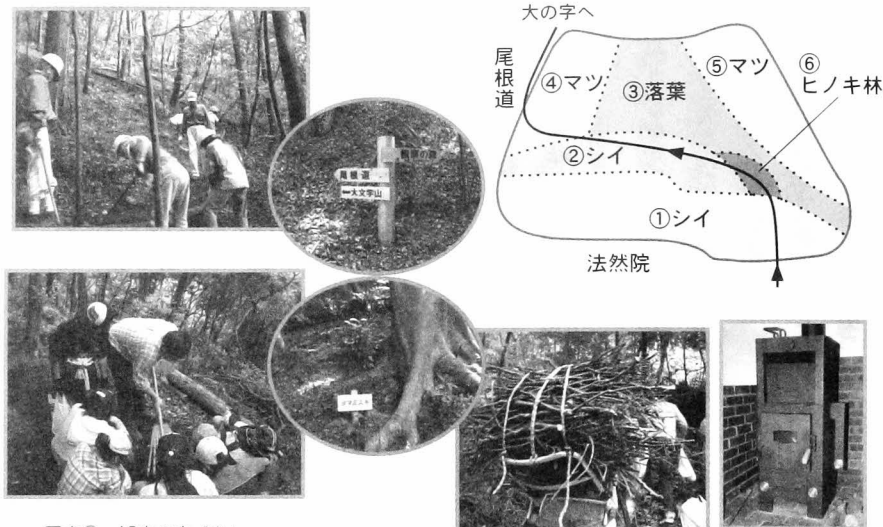


写真15 観察の森づくり

方針を立て、毎木調査をした上で進めています。「森の子クラブ」の子どもたちも参加することがあります。松枯れ対策のために地かき体験をしたり、お寺に備えた薪ストーブのために柴刈り体験をしたり。中学生は、柴を背負って山を下りてくれました(写真15)。

子どもたちを対象とした主催活動では、「森の子クラブ」以外に、年齢制限のない単発の催しを行っています。小さな子どもたちが親子で来てくれることもあります。また、幼稚園や小・中学校の受け入れも行っており、五年生のクラスが来てくれた際には、森に入った後に、「一言感想文が寄せられました。

「いつもと全然違う音だった」。「あんなに繁った緑は見たことがなかった」。「葉っぱは一枚一枚、色が違う。植物もほくちと同じいきものだと感じた」。

これまでこんな感じで森を味わったことがなかったというような感想を聞くにつけ、子どもたちの日常を考えさせられています。

では、ここで、「森の子クラブ」の子どもたちが届けてくれた感想文を、いくつか紹介したいと思います。

「いつも新しい発見があつておもしろい。鳥がおそわれたあとがあつたら、その鳥をおそった生き物の足あとが残っていないかをさがして、たんでみたいでわくわくした」。

「ぼくは森にあるものの中で木の枝がいちばんすきだ。木の枝にはいっぱい形がある。ぼくが山に行くとき、一番楽しみなのは、おべんととうと木の枝です」。

「ハチの巣が落ちていました。先のところは黄色く、きちんと正六角形になっていました。あの形はすごいと思います」。

「動物のフン。無臭で、大きさは親指大。中にはムクノキやカキのタネ、動物の毛も入っていた。このフンを残していた動物は雑食性といえる。私と同じところを通つたかと思うと、何だかうれしい」。

「ヘビがカエルを丸呑みにしていた時は、ヘビも生きていくのに食べ物が必要なんだな」と感じた。生き続けていくための手段やその証拠がたくさん発見できた」。

「森の子クラブに入つて一番よかったところは、自由があるところだ。学校をツアー旅行とすると、森の子クラブは家族や友人と行く個人の旅行といった感じである」。

子どもたちの無心な姿には、人が本来持つている「力」を感じます。それは、三年生なら八歳から九歳、六年生でも十一歳、十二歳だからこそ失っていない力なのかもしれません。カエルを手に乗せたり、ヘビの脱皮殻に触ったり、フンを調べたり。さすがに最初は尻込みする子どももありますが、知らず知らずのうちに周りの子どもたちに影響され、ともすれば積極的になっていく、そんな様子をいつも見せてもらっています。

また、環境学習でよく言われる、よく見る、においをかぐ、手触りを試す、目を閉じて音を聴くというような、五感を使う体験も、森の中でそこにいる皆と取り組むことによって、子どもたちの間に特別な感覚が生まれてくるように感じます。

必要なのは「場づくり」と「時間づくり」。
子どもならではの時間の中で、
自ら育つ力を呼び覚ます。

では、最後に、中学生の感想文を二つ、紹介したいと思います。「森の子クラブをやっていると、不思議と力がわいてくる。でも、

私たちが楽しんでいる日にも、世の中では大変なことが起きている。森の子のあとにニュースを見ると、なぜか、いつもより他人事ではないような気持ちになる」。

テーマを思い出してみます。「森里海連環学の理念を持つて実践する次世代を育む教育、人づくり」。このことにつながる「初めの一歩」が、身近な森で生き物と出会う体験の中に見つかるのでは、ということをお話してきました。

さらにここで、その核心として、この感想文の「他人事ではないような気持ち」というところに注目したいと思うのです。

自然環境の保護、生物多様性の保全などの言葉は日頃から学校などで教わる機会もあつて、頭で理解するだけなら、子どもたちも案外すんなりと聞いてしまうかもしれません。しかし、その場合に欠けるものは、この「他人事ではないような気持ち」、すなわち、共感です。その地にあるべき風景、そこにいるべき生物にどれほど共感できるかどうか、自分に引き寄せて考えられるかどうかが重要だと思います。そして、この共感とは、野外での体験がなければ、おそらく得られないものなのではないでしょうか。

では、「二人目の感想文です、

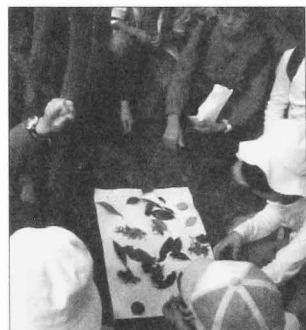
「森の中には聞いたこともないような不思議な生き物がたくさんいて、驚く場面が何度もあつた。印象深かったのは、オオゲジの脱皮だ。なぜか神秘的なものを感じた」。

生き物の姿に不思議を感じ、命に畏敬の念を抱くことは、何よりもまして大切なことだと思います。自然とは、とにかく広大で、複雑で極めがたい、神秘的なものです。ところが、現代の都市生活では人工物に囲まれて過ごすことが圧倒的に多くなり、そういう感情を抱く機会が減ってしまいました。だからこそ、子どもたちには、自由な、型にはまらない想像力で、野生の生の営みからさまざまな感情を受け取って大きくなってほしいと思います。

「森の子クラブ」で使っているフィールドノートは、子どもたちに任せきりで大人が見ることはしません。「何を書いてもいい、自分だけのものだよ」と言つて渡しています。そして、活動後には「もりのこうしん」というプリントを、もう一度きちんと伝えたいことや分かち合いたいことを振り返りながら、今日の生き物との出会いは「一期一会かもしれない」というメッセージを込めて、郵送しています。



子どもたちとの活動



森の子クラブ

自然観察の醍醐味は、「遊び」の精神に通じるものです。どんな次の扉を開けたくなるというような感覚でしょうか。私たちの活動は、一緒に野外で遊ぶ仲間であることを目指してきました。現代、野外で遊ぶ子どもたちの姿が減ってしまったことは否めないでしょう。自由に遊べる場所や、遊ぶ時間そのものが、加速度的に失われてきたことを感じます。大人には、そのことを意識する責任があります。

本来、子どもとは自ら育つものです。このシンポジウムのタイトルには「人づくり」とありますが、こと、子どもたちに関して言えば、場づくり、時間づくりこそが、大切なのではないかと感じます。日常の生活から少し離れて、本来の好奇心を目覚

めさせ、子どもならではの時間を取り戻し、自ずと育つ力を呼び覚ますのに、何度でも、いつでも行ける身近な森は、本當に格好の場所であると思います。

壮大な「森里海連環学」という言葉を通して、どんなに地域性の高いことにおいても忘れてはならない「つながり」の視点を、改めて学ばせていただく機会になりました。ささやかな私たちの活動ですが、大きな視野を持つ大切さを共有させてい

ただきながら、身近な森の価値を子どもたちと共に感じ続けていきたいと思います。

ご清聴いただき、ありがとうございます。